様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　４ 月 ２８ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１３３５０

研究課題名（和文）現代における「民謡」の解明―趣味の共同体としての民謡社会

研究課題名（英文）Minyo in Modern Japan: the Society of Japanese Folk Song as a Community of Hobby

研究代表者
梶丸　岳（Kajimaru, Gaku）

京都大学・人間・環境学研究科・助教

研究者番号：５０７３５７８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は秋田県の民謡社会を対象に、参与観察やインタビュー調査などによって、現代日本における「民謡」の在り方や民謡が現代日本において生み出している社会の解明を目的とした。
その成果として、①秋田県において民謡はステージ中心に変容してきたこと、②県内の民謡大会の来歴や運営方法の多様性と変遷、③民謡を習うきっかけと動機に若手と高齢者で違いが見られること、④現在の民謡愛好家たちが作るつながりが地元の教室を結節点としつつ県外まで広がっていること、⑤現代の民謡が上演型の場を軸にしつつ、かつてからあった参与型の場もまだあることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義として、民俗学的民謡研究が等閑視してきた現代の民謡の姿を具体的事例から明らかにしたこと、地縁・血縁といった概念と結びつけられやすい農村部にも趣味によって結びつけられた社会的ネットワークすなわち「趣味の共同体」があるということ、そして民謡の「場」の重要性と多様性を明確に示した点にある。
また本研究の社会的意義は、ステージ上で歌うのが基本になっている現代民謡に対して、伝統的な民謡とも異なる民謡の姿を例示することを通じて民謡の幅広さを示し、衰退の一途をたどる民謡の現代的可能性を示した点にある。

研究成果の概要（英文）：This research project aimed at clarifying the position of Japanese folk song (min’yo) in Japanese life and figuring out the social network of amateur folk song performers in Akita prefecture by participant observation and interview.
This research obtains the following results; (1) Japanese folk song has been modernized as a stage performance also in Akita, (2) there is some diversity in the history and management system of folk song contests in Akita, (3) the beginning and motivation of singing Japanese folk song are significantly different between younger and older singers, (4) the node of a social network of amateur folk song singers seems local lessons they join, but it extends over other prefectures, (5) presentational performance seems prevailed in Japanese folk song, while participatory performance remains and they are practiced in a different type of “ba” (a place with agency).

研究分野：民族音楽学

キーワード：民謡社会　秋田県　民謡大会　民謡教室　趣味の共同体

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

民謡はこれまでおもに民俗学で扱われてきた芸能である。かつてドイツでヘルダーが「ドイツ的なもの」を求めて民謡を収集したように、民謡は民族の精神を表わすものと考えられていた。日本でも柳田國男以来、農村に暮らす人びとの民俗を表わすものとして、そして日本人の「心のふるさと」として、各地の民謡が研究されてきた。浅野（1966）のように研究の中心は民謡の歌詞や民謡を生み出した歴史的・民俗的背景の分析であったが、町田嘉章（佳聲）らが編纂した『日本民謡大観』のように民謡の音楽面に関する記録や分析も行われた。中でも小泉文夫が民謡の音階について打ち出した理論（小泉 1958）は現在に至るまで定説となっている。こうした音楽面の研究も、基本的には日本の民俗性を音楽面から析出しようとする試みであった。従来の民謡研究の基礎にあるのは、民謡を民俗から規定する考え方であり、「そうした民謡は現在の我々の生活の中からは、ほぼ消失した」（長野 2007:21）と考えられている。

だが、世間で一般に「民謡」と呼ばれている歌は今も活発に歌われている。民謡は戦前に幾度かブームが起こり、戦後は NHK の素人のど自慢に取りあげられ、各地で民謡大会が開かれるなど再度のブームを経て、現在はその時代の延長線上にある。だが「民俗」概念に縛られた民謡研究はこうした今「民謡」と呼ばれているものを「俗謡」などとして（竹内 1981）研究の視野から排除してきた。その結果、民俗学から離れた視点で日本民謡の現代化を詳細に論じた Hughes（2008）を除き、民謡大会や民謡関連団体、民謡教室の活動がどのような社会を生み出し再生産しているのか、また民謡の歌い方がどのように変化しているのかについてはほとんど研究がない。これは民俗学が「人間不在」であった（門田 2014）ことの当然の帰結であるが、いつまでも時代に目を背けていてよいはずはない。民謡がかつてと異なる在り方を確立している今、新たな視点に立った民謡へのアプローチが求められている。

２．研究の目的

本研究は秋田県の民謡愛好家たちの社会を対象に、民族音楽学的視点と手法から、現代日本における「民謡」の在り方、民謡が現代日本においていかなる社会を生み出し再生産しているのかを明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

本研究の調査は秋田県内各地で行われている民謡大会（その多くは「一曲民謡大会」（Hughes2008））と複数の民謡教室を主な調査地とした。各年度の調査期間と主な調査対象は下記のとおりである。

2017 年度	8/17～28	本荘追分全国大会、全県かけ唄大会、仙北荷方節全国大会など
	9/13～15	金澤八幡宮伝統掛唄大会
	9/21～25	生保内節全国大会
	1/16～18	三吉神社梵天祭
2018 年度	5/13～14	あきた民謡祭
	8/17～24	本荘追分全国大会、全県かけ唄大会、民謡教室 2 か所
	9/6～9	秋田馬子唄全国大会など、民謡教室 1 か所
	9/13～24	金澤八幡宮伝統掛唄大会、三吉節全国大会など、民謡教室 1 か所
	11/22～26	秋田飴売り節全国大会、民謡教室発表会
2019 年度	4/6～8	秋田港の唄全国大会
	8/23～26	全県かけ唄大会、仙北荷方節大会、民謡教室 1 か所
	9/6～8	秋田おはら節全国大会
	9/13～15	金澤八幡宮伝統掛唄大会

調査は大会関係者、民謡関係者を対象とするインタビュー調査を主とし、それに加えて参与観察とアンケート調査も行った。これに加え、民謡大会の過去の記録（主にプログラム冊子）や秋田県の民謡関係資料も収集し分析を行なった。

４．研究成果

本研究の成果として、（１）秋田県における民謡のありかたの変遷とその要因、（２）秋田県内の民謡大会それぞれの設立事情や運営方法の変遷、（３）民謡を習うきっかけと動機、（４）現在の民謡愛好家たちが作る社会的ネットワーク、（５）「場」から見た現代の民謡のあり方の 4 点が挙げられる。

（１）秋田県における民謡のありかたの変遷とその要因

秋田県における民謡の現代化の過程は Hughes (2008)で描かれたものとおおむね一致していることが明らかとなった。具体的には、主に戦後から民謡歌手が職業として成立するようになり、プロの歌い手たちが舞台で和服を着て伴奏付きで歌うようになり、それが民謡の歌い方として

スタンダード化していった。また歌い手たちは教室や会を主宰するようになり、弟子たちがそこで民謡を習い大会で腕を競うことが民謡実践の中心となるようになっていった。

こうした変化をもたらしたのが、民謡の評価基準の変化である。確かに戦前から歌の上手・下手の評価は存在したが、上記の「現代化」のプロセスのなかで音楽的な表現が重視されるようになる一方、即興で歌詞を生み出す能力は評価されなくなっていった。現代でもまれに即興で歌詞を歌う事例が観察されたが、大会の場ではなかったし、非常に例外的な出来事であった。結果として「フシを綺麗に回す」「コロをうまく回す」といったかなり細かい音楽的技法が発展し、音楽的に聴かせる歌として民謡が進化することになった。こうした音楽面中心の評価基準は大会での審査基準でもっとも典型的に見られる。

一方、こうした変遷を経なかったのが掛唄大会である。現在掛唄の大会は横手市の金澤八幡宮と美郷町の熊野神社でそれぞれ行われており、前者は大正時代から、後者も戦後から 50 年以上の歴史がある大会である。掛唄は仙北荷方節に乗せて即興で歌を掛け合いその歌詞を競う民謡であるが、秋田県の民謡愛好家たちからは「確かに民謡ではあるが別物」として認識されている。その理由は歌詞の即興性にある。また掛唄の旋律は一応仙北荷方節ということになっているが、仙北荷方節大会で歌われている歌い方とはかなり異なっており、また歌い手ごとでも節が微妙に異なっている。そして一般の民謡大会では大きな問題となり得るこの節の多様性は、掛唄大会ではあまり問題とされない。大会の審査では歌詞が重視されるため、他の民謡大会に比べて歌い方の技巧的な側面はほとんど問われないのである。

このように現在一般の民謡と掛唄はまったく異なるように見えるが、聞き取りや資料によると、元々戦前あるいは 1960 年代あたりまでは、現在歌詞が決まっている民謡でもさまざまな歌詞が歌われていた。ここから、一般の民謡大会と掛唄大会の差異は、元々生活の中で歌われていた民謡が大会化していくなかで異なる方向に発展していった結果であると考えられる。ただ後述するように、現在もかつての民謡が失われたわけではない。

（２）秋田県内の民謡大会それぞれの設立事情や運営方法の変遷

本研究では秋田県で開催されている民謡大会のうち、掛唄大会以外にも 12 か所の大会について運営代表たちに対するインタビュー調査と資料調査を行ない、うち 7 か所の大会を現地調査した。Hughes（2008）は一曲民謡大会の設立背景として「地域の誇り」と「観光・地域振興」を挙げているが、秋田県でもこれは大枠において当てはまっていると言えそうである。だが個別の大会を見てみると、なかには「たまたま地元出身の歌手がその曲でレコードを出したから」という理由で大会が開始された例など、それぞれの大会が非常に多様な事情によって開始されており、一概にこの 2 つにまとめることが難しいことも明らかとなった。

大会の運営についてはしばしば地元の公的セクター（主に地方自治体）が関わっているところと、民間あるいはほぼ地元の愛好家たちによって運営されているところに分かれることが明らかになった。どこも開始当初は公的資金などの援助が入っていたようであるが、長引く不況と人口減少で地方自治体の財政が悪化していくなか、公的助成は削減が続いており、ほぼ実行委員会の手弁当に頼っている大会もあった。そのうえに委員や参加者の高齢化が進んでおり、早晩大会が減っていくことは避けられないのではないかという危機感は、どこの大会でも、またプロの民謡関係者の間でも共有されていた。実際 2019 年の大会で終了する大会が現れており、秋田県の民謡大会は現在曲がり角を迎えていることは明らかであった。

（３）民謡を習うきっかけと動機

大会などの場におけるインタビュー調査から、民謡を歌うきっかけとして高齢者は「元から好きで（自己流で）歌っていたが、定年退職や子の独立で時間ができたので改めて先生について習うようになった」というものが多く、30 代以下になってくると「幼少時に祖父母が参加している民謡の会に連れていかれて興味を持った」という例が多いことがわかった。30 代以下のきっかけは民謡愛好家やプロの間で比較的よく聞かれるものであったが、これ以外にも通っていた幼稚園の先生に誘われた例や、たまたま近所で教えているのを子どもの頃耳にしてどうしても習いたくて親に通わせてもらった、といった例もあり、必ずしも祖父母から孫へというきっかけがあるわけではないこともわかった。

歌う動機も高齢者と若手で異なることも見えてきた。高齢者はかつて自身の親や祖父母が囲炉裏を囲んでは歌い、宴会があれば歌っていたことを覚えていて、その延長線上に民謡を捉えており、基本的には楽しみや健康維持などのために歌っている、とインタビューで答えた例が多かった。一方若手は幼少期から民謡の会に属しており民謡学習歴が長く、若いほうが声がいいこともあって、大会ですでにいくつも賞を取っていることが多い。もちろん彼ら／彼女らも民謡を歌うことが好きなのであるが、それに加えて大会で好成績を収めることを強く意識していることが見て取れた。

（４）現在の民謡愛好家たちが作る社会的ネットワーク

調査の結果、現在の民謡愛好家たちは基本的に何らかの民謡関連団体に所属し、歌をプロから習って大会に出ることがわかった。大会でもこのことはほぼ前提となっており、大会によっては出場者との連絡用に団体名を申込用紙に書かせているところもあった。

実際、民謡愛好家たちは基本的に民謡関連団体の開く教室やプロが主催している会を中心と

する社会的ネットワークを築いている。教室における練習の形態は指導者によって異なるが、基本的にひとりひとり歌わせて、指導者が修正点を簡単にコメントするというターンが順番に行われる点はおおむね共通している。教室は定期的に開かれており、そこでしばしば同じ人びとが顔を合わせる。大会に行けば控室で集まって座って出場準備をし、練習をし、あれこれと雑談をする。いくつもの「島」のように出場者が集まる出場者控室を見れば、民謡愛好家たちの社会的ネットワークがそれぞれの教室・会を結節点としてできていることが一目瞭然である。

だが、控室の中で過ごしてみると、民謡愛好家たちのネットワークがそれぞれの会のなかに閉じているわけではないこともよくわかる。調査のために控室で顔見知りの参加者と話していると、しばしばほかの会の人びとから声を掛けられて話が中断したりする。調査でしばしば聞かれたのは「みんなどこの大会行っても大体顔ぶれが同じだからみんな顔見知り」という話である。これは複数大会のプログラムを見比べるとよくわかる。まだ量的な検証はできていないが、複数大会・複数年度のプログラムを見比べると、かなり以前から基本的に顔ぶれがあまり変わっていないことが見て取れた。長年頻度は低いながら何度も顔を合わせていくなかで、会同士や民謡愛好家個人間の人間関係が築かれている。なお、大会では秋田県各地から参加者が集まるため、かなり遠方同士の人びとでも親しい関係が見られることもある。

さらに大会参加者へのインタビューやプログラムの情報から、大会には盛岡や山形のような東北隣接県からの参加者や、東京や大阪などかなり遠方からの参加者が含まれていることがわかった。こうした参加者がいる背景に、秋田民謡が民謡界においてかなり以前から全国的に知られており、日本民謡のスタンダードナンバーになっているという事実がある（竹内 1981）。調査では東京で秋田県出身の民謡歌手が会を主宰していてその教え子が参加していた事例や、秋田県在住の民謡歌手が大阪や奈良に教えに行っておりその教え子が参加していた例も見受けられた。そして、そうした秋田県から離れた地の教室と秋田で教室に通っている愛好家たちの交流もあるようである。

以上のようなネットワークはまさに、地縁・血縁から離れた趣味の共同体と言ってもよいだろう。秋田県はかなり広い県であるが、地元の生活的な広がりを乗り越えて、さらに県外まで人びとが共通の趣味で繋がりを維持しているのである。

（５）「場」から見た現代の民謡のあり方

以上述べてきたように、現代の民謡は大会におけるステージ上のパフォーマンスがデフォルトになっている。こうした場において民謡愛好家たちは練習の成果を発揮し、規定のパフォーマンスを行なうべく規定通りに歌う。歌の順番も歌詞も節回しもあらかじめ決められており、その枠内でそれぞれの腕前を競う。ステージパフォーマンスという場において、歌い手たちは基本的にセッティングされた場にうまくはまるように自らを調整してパフォーマンスを行っている。こうした場のあり方は、習い事の発表会や競技会一般に見られるものである。実際、会によっては定期的に発表会を行なっている。ある意味現代の民謡は習い事化しており、Hughes(2008)の言う「現代化」によって民謡は新たな場にニッチを移していると言える。

だが、それだけで現代の民謡を尽くせるわけではない。このことに気づかされたのは生保内節全国大会での調査である。生保内節全国大会は秋田県仙北市で開かれている大会で、現在は公民館や図書館のスタッフを中心に、非常にシステマティックに大会が運営されている典型的な大会である。ここで展開される実践は典型的な「上演型パフォーマンス」（トゥリノ 2015）であり、そこに参加する歌い手たちは場にはまるように振舞いっている。そして大会が終われば、その大半は緊張を解いてめいめい帰っていく。

しかし大会が終わった後に行われる「直会」ではまた異なった「場」が見られた。例年直会（大会の打ち上げ）は田沢湖駅近くの飲食店 2 階の座敷を借り切って開かれる。この座敷には床の間の前にマイクと伴奏者用のスペースが確保されており、その空間がちょっとしたステージのようになっている。この座敷に大会スタッフや審査員、伴奏を依頼されていた演奏家などが集まって宴会が催されるのだが、宴もたけなわになるとここに歌の場が生まれる。司会に促されて、あるいは自発的にマイクを握って生保内節を歌い、伴奏ができる人はいそいそと楽器を取り出して伴奏を付け、踊れる人は踊り出す。この場に立ち上がっているのは典型的な「参与型パフォーマンス」（トゥリノ 2015）である。人びとは各々の技量や気分に従ってさまざまな役割をパフォーマンスにおいて果たす。ここでは歌は評価されるために歌うのではなく、場を盛り上げ楽しむために歌われているのである。ここでは、「消えた」と言われた民謡がまだ息づいている。

ここでの「場」は行為が展開される「容器」のようなものとしての「場所（place）」あるいは「空間（space）」（Low 2017）ではない。むしろ人びとを動かし、また人びとの動きによって変化していくような、まさに「場（*ba*）」（cf. Hanks et al. 2019）としか言いようのないものである。おそらく民謡は公的に目立つ場所においては確かに上演型に移行しているが、私的な、あるいはよりくつろいだ場では参与型のままなのである。

＜引用文献＞

浅野健二　1966『日本の民謡』岩波書店。
門田岳久　2014「「民俗から人間へ（序章）」門田岳久・室井康成（編）『<人>に向きあう民俗学』

森話社、pp.8-39
小泉文夫　1958『日本伝統音楽の研究』音楽之友社
竹内勉　1981『民謡―その発生と変遷』角川書店
トゥリノ，トマス（野澤豊一・西島千尋訳）　2015『ミュージック・アズ・ソーシャルライフ：歌い踊ることをめぐる政治』水声社
長野隆之　2007『語られる民謡―歌の「場」の民俗学』瑞木書房
Hanks, William, Sachiko Ide, Yasuhiro Katagiri, Scott Saft, Yoko Fujii, Kishiko Ueno 2019. Communicative Interaction in Terms of Ba Theory: Towards an Innovative Approach to Language Practice. *Journal of Pragmatics*. 145: 63-71.
Hughes, David W. 2008. *Traditional Folk Song in Modern Japan: Sources, Sentiment and Society*. Global Oriental.
Low, Setha M.2017. *Spatializing Culture: The Ethnography of Space and Place.* Routledge.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 梶丸岳	４．巻 82
２．論文標題 掛け合い歌が駆動するソサイエティー秋田県の掛け合い歌「掛唄」の場をめぐって	５．発行年 2018年
３．雑誌名 文化人類学	６．最初と最後の頁 464-481
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.14890/jjcanth.82.4_464	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 梶丸岳
２．発表標題 一曲民謡大会から見る現代の民謡社会―秋田県の民謡大会を事例に
３．学会等名 第52回日本文化人類学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kajimaru, Gaku
２．発表標題 Two Evaluation Poles of Japanese Min’yo and their Consequence in Competitions: Local Single-Song Contests and Kakeuta Contests
３．学会等名 the 45th ICTM World Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 Kajimaru Gaku	４．発行年 2021年
２．出版社 Kyoto University Press & Trans Pacific Press	５．総ページ数 未定
３．書名 The Co-emergence of Performance, Place, and People: The Anthropology of Ba	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考